

Tomas Bodin

presents

私がTHE FLOWER KINGS(以下TFK)のキーボードの第一人者・Tomas Bodinに電話をかけた時、スウェーデンのウブサラは零下20数度だったが、会話は暖かいもので、話すことは沢山あった。去年TomasはTFKのアルバム「|Unfold the Future」で成功を取めたわけだが、どのぐらいの人が「Inside Out」からリリースされた彼のセカンド・ソロ・アルバムの「|Pinup Guru」を探して聴いてみただろうかと考えてしまう。私は当時このアルバムを熱心に評したのだが、CRSはこのアルバムをCRS Rock Shop用に購入しなかった点で罪を犯したかもしれない。私はTomasが現時点で「|Sonic Boulevard」というタイトルがつけられた3枚目のソロ・プロジェクトを彼のウェブサイトからリリースする前に、この点を正しておきたいと思う。(訳者註:その後「|Sonic Boulevard」は「Inside Out」からのリリースと決まった)

Tomas Bodinは44歳になろうとしているところだ(でも、10歳若く見える)。その年代の人の多くは、スリッパを履きパイプをくゆらしてくつろいでいるが、彼はまだ音楽的なピークを迎えていない。彼は2回の離婚を経験し—この部分については後で触れるが—子供もいるような経験豊かな人だが、そんなミュージシャンを理解するのは興味深い冒険だ。

Tomasの場合、ベテランのプログレ・ミュージシャンが気軽に使う「|音楽を境界を越えた所にもっていくこと」という言葉は、

文字通りそれを表す。小さくなって彼の頭の中に入るのは、国や音楽の境界線が存在しない音楽のワンダーランドに流されるようなものだろう。事実、彼は真の音楽のパイオニアなのだ!

後で、Tomasとはある人との会話について触れた。その人はTomasに民族音楽と純粹にプログレなものとを混ぜないよう懇願したという。私も、そして有難いことにTomasも、その意見にはまったく同意できなかったが、事実Tomasは「|音楽には二通りしかない。良い音楽と悪い音楽だ」という言葉を信じているのだ。最初に私がこの言葉を聞いたのはRick Wakemanからで、その後これに同意できるようになったものだ。Tomasは4歳でピアノを始め、その後成長するにしたがって電子機材に興味を持つようになった。彼にインスピレーションを与えたのは皆の想像する通りKeith EmersonやRick Wakeman等だが、その中にはManfred Mannも入っている。

「|ギタリストにとって、何をしているか人に見せるのは本当に簡単だよ。あれは見せびらかす為の楽器だよ」とTomasは言った。「|キーボードは、言ってみればあんまりファッショナブルじゃないよね。」

Rick Wakemanのショーに何度も行っている人ならRickがポータブル・キーボードを使っているのを見たことがあるだろうが、Tomasはこれを使ったことがない。「|ああ、ギター・キーボードね。使ってみるべきなのか

Your Pinup Guru

Thanks to Martin Hudson (CRS)

Photo : by Linda van Rooy(P.13) by Angela Schultz(P.9,11)

もね」とTomasは言った。

私達は将来ギグでギターのRoine StoltとキーボードのTomasがフロントでバトルをする様子を想像して話し、これはTomasを面白がらせた。

Tomasは多くのクラシック・ロックのファンと同じような時代に育ったので、彼に影響を与えたミュージシャンについて聞いても、驚くことはない。

「THE BEATLES、DEEP PURPLE、LED ZEPPELIN。でも、僕はいつもクラシックを聴いていたんだよ。14歳から沢山のクラシック音楽を集めたんだけど、実際初めて手にしたレコードはTHE BEATLESだったな。もし好きな作曲家を選ばないといけないとすると、ショスタコーヴィッチかプロコフィエフ。それから今はグスタフ・ホルストもだね。」

Tomasは彼が音楽が音楽を好きになったのを、特に誰か一人の影響によるものだとは思っていない。彼の父親はエコノミストで、母親は看護師、そして兄と姉が二人ずついたが、アメリカに直接面識のない、ジャズ・ミュージシャンの叔父がいるのも知っていた。「家の中には音楽が溢れていたけど、実際ミュージシャンと言えるのは、この叔父だけだな。姉達はピアノを弾こうとしたかもしれないけど、(自分が)ただ座って演奏する方が簡単だったよ。」

Tomasが家族の中で生まれつきのエンターテイナーだったのかと聞くと、彼は笑って「僕はユーモアのセンスが沢山あったし、家族のテディ・ベアだったんだ」と言った。

後にしばらくそこを離れはしたが、Tomasはウプサラで生まれ育った。「そう、なぜかわからないけど、僕は自分のルーツにはまり込んでいるんだ。でも若い時にストックホルムに住んでいたよ。ストックホルムはスウェーデンでは主要な音楽の町だから、住むのは楽



だったよ。でも、何故だかわからないんだけど、ここに帰ってこようと思ったんだ。」

TFKの音楽のルーツは'80年代に種が播かれた。|RoineがSTOLTというプロジェクトでキーボード奏者が必要だった時に電話してきたんだ。最初はドイツでギグを二つやるということだった。RoineはMidam フェスティバルで演奏する曲をいくつか録音してあって、現地にはRoineに可能性を見出して、ツアーして欲しいと思っていた人がいたから、Roineはバンドが必要だったんだ。僕達は音楽を演奏し続け、Roineはアルバムもう一枚分の曲を作った。1985年のことだったと思うよ。Roineの事は、その前から知っていたんだ。彼はKAIPAでプレイしていて、KAIPAは結構ビッグだった。だからRoineは成功していて、僕が話したり触ったりする機会なんか無いと思っていた人達の一人だったんだよね。」とTomasは笑った。|だから、彼は70年代にはここではスターみたいなもので、僕はグループの事を知っていたし、大きなパスも見だし、沢山ツアーしているのも知っていたし、とても感心していたんだ。彼が電話してきた時、もちろん僕は即リハーサルに入ったよ。僕達はリハーサルで会って、曲を演奏しようとして、まあまあうまくいったよ。」

TFKは今や何枚ものアルバムを出し、スウェーデンの外でもよく知られるようになった。これは簡単には起こらなかったが、Tomasを特に驚かせたわけでもないようだ。

|覚えているんだけど、Roineが最初にアルバムを作った時、500枚作ってそれを売ったから、Roineはとてもハッピーだったんだ。それから小規模のディストリビューションを持った通販会社も、とてもハッピーに見えた。当時、何が起こるかなんて誰も考えられなかったし、初めて外国でのギグをした時、僕はすごくハッピーだった。でも、ある程度の成功には慣れてしまうと思うんだ。僕達はある種の謙虚な態度を維持しようとしてい

るし、成功を取めて違う人間になってしまうような人は本当に嫌いなんだ。」

Tomasはソロ・アルバムのスリーヴにウブサラ郊外の彼が住むエリアについて書いている。このエリアでは|80の異なる言語が話されている。それは80種類の文化と80種類の音楽のスタイルがあるということだ。」このコスモポリタンな(人口や文化の)到来はTomasにアルバムのアイディアを与えたが、このクロスオーヴァーなスタイルは常にTFKの音楽にあったもので、実際その音楽は単なるプログレッシヴ・ロック以上の何かを作り上げる為に自然に成長している。

|目的を持つことはできるけれど、風がどこに吹いていくかについていかにくちやいけなから、その目標は短期間しかそこになんないんだ。僕達はずっと半年進んでいようとしていると思うし、自分達独自の方向に発展しようとしていると思う。TRANSATLANTICがグループになるなんて誰もわからなかったし、そうなった時、たぶんTRANSATLANTICの可能性を実感して、僕はけっこう心配したんだ。ファースト・アルバムが出た時、予約だけでこれは大成功だとわかった。だから僕は、ああ、ダメだ、TFKの終りだと思ったけど、そうじゃなかった。次に何かがあるか、物事がどう進んでいくか、わからないからね。」

TFKのメンバーにとっては、実際恐ろしい想像だっただろう。しかし、もしRoineがTRANSATLANTICにもっと集中するようになってしまっても、TFKはまだ存在しただろうか？

|RoineにはTFKがあるんだっていうことを忘れちゃいけないよ。それに現在演奏する面ですごく沢山のインプットがあって、ステージではケミストリーがあって、というようなことも。だから例えば僕達がバンドをやめてしまって、Roineが一人でステージに立っても同じものにはならないし、僕達が

Roine無しでTFKをすることもできない。それは不可能だ。考えられないよ。」Tomasは断固としてそう言った。

そこで、TomasがRoine無しのTFKという想像にぞっとしていたのと同時に、我々はこのスウェーデンのバンドが人気を高め、|Pinup Guru|のようなソロ・プロジェクトというボーナスを得たことを喜ぶことができた。

|ソロ・プロジェクトは生活の仕方に関係あるんだ。説明すると、何年前か、僕はいろいろな劇場で作曲家として、あるいは単なるミュージシャンとして働いていたっていうことなんだ。当時TFKはそんなにセールスが良くなかったし、そんなに沢山コンサートもなくて、それでは生活できなかったから、この(劇場の)仕事が僕の主な収入源だったんだ。ここ一年ぐらい僕がやろうとしているのは、異なったスタイルのプログレッシヴ・ミュージックを作ることだけによって生活しようとするってことなんだ。だから作曲という面では、これからはTFKと自分自身の音楽にもっと(時間を)充てられることになる。今後CDをリリースする計画が沢山あるよ。」

音楽における仕事の増加を、TFKが非常に忙しかった去年以上際立たせた年はないだろう。|去年はここで一番の劇場・Royal National Theatre of Dramaの仕事から始まったんだ。そこで2ヶ月働いてから女性アーティストのデモを二曲プロデュースした。その後僕達はアメリカをツアーして、そのすぐ後|Pinup Guru|の仕上げをして、Jonas ReingoldのKARMAKANICを手伝って、夏中|Unfold the Future|のキーボードや曲作りをして、ヨーロッパをツアーしたんだ。もちろんイギリスのRotherhamでもやったよ。(註:RotherhamはCRSの所在地)だから去年はとても忙しくて、ノンストップで働いているような感じだったね。」



Tomasには自分自身の時間が無いように見えるが、彼は自分が仕事中毒にならないように気をつけている。|スウェーデンにHoneytrapという言葉があるんだ。これは自分が好きな仕事をするのは気持ちの良いことで、そうすると仕事で自分自身を見失って何もなくなってしまおうという罠にかかる可能性があるという意味なんだ。僕には気にかける必要はない音楽以外の生活がある。子供がいるし、ガールフレンドがいるし、だから面倒をみる家族がいるっていうことなんだ。新しいプロジェクトがある時、これをやらなくちゃいけないと確かめるし、終わったら次のプロジェクトに移る前にちょっとリラックスするんだ。ホリデーをとるのは状況によるけど。というのも、今年は僕らは夏に沢山ツアーをするからね。でも時間を見つけるよ。」

多くの偉大なキーボードの名手はそれぞれ確固たる自分のスタイルを持っているが、Tomasのスタイルの場合もそうで、これは彼